

2 社会的状況

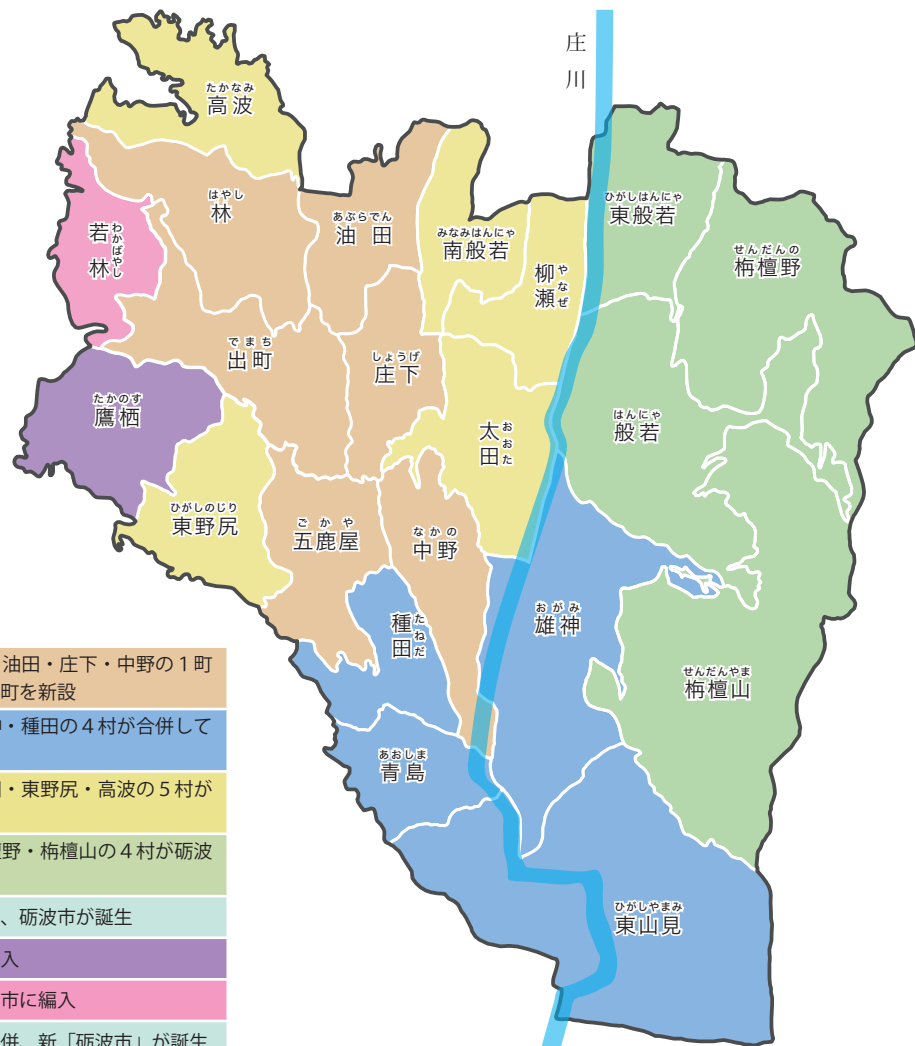
(1) 市域の変遷

- 1 町 20 村 明治 22 年（1889）3 月 1 日の町村制の施行により、出町ほか 20 村が誕生しました。その後、昭和 27 年（1952）4 月 1 日に出町を中心に中野・庄下・五鹿屋・油田・林の近隣 1 町 5 村が合併し、砺波町が発足しました。また、同年 6 月 1 日に東山見・青島・雄神・種田の庄川町 4 村が合併し、庄川町が新設されました。

昭和 28 年（1953）に施行された町村合併促進法にもとづいて、昭和 29 年（1954）1 月 15 日に南般若村・柳瀬村・太田村・東野尻村・高波村の 5 村が砺波町に編入されました。つづいて同年 3 月 1 日に東般若・般若・梅檀野・梅檀山の 4 村が編入され、庄川を越えて町域が拡大しました。

- 砺波市誕生 昭和 29 年（1954）4 月 1 日に砺波町が市制をしき、県下 8 番目の市として砺波市が誕生しました。その後、昭和 30 年（1955）1 月 10 日に鷹栖村が砺波市に編入、さらに昭和 32 年（1957）9 月 30 日には若林村の一部が砺波市に編入されました。

- 平成の合併 平成 16 年（2004）11 月 1 日、砺波市と庄川町が合併し、現在の砺波市が誕生しました。

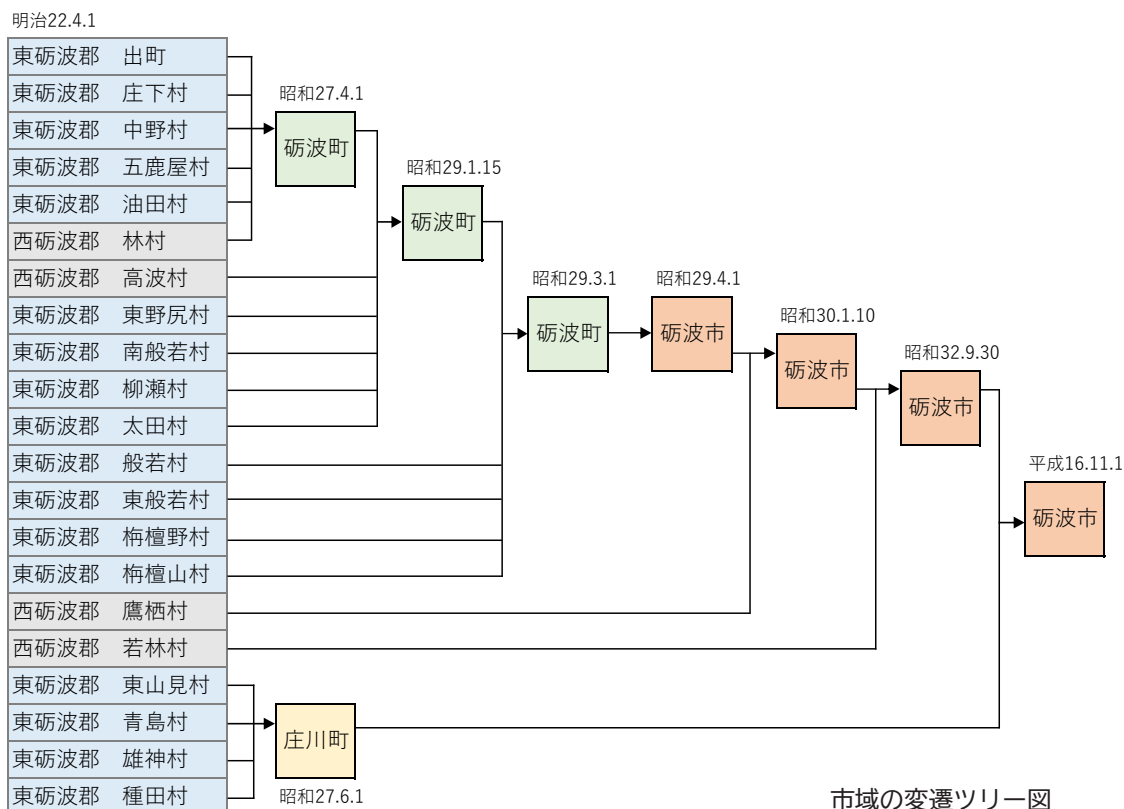


砺波市 町村合併のあゆみ

S27.4 (1952)	出町と林・五鹿屋・油田・庄下・中野の 1 町 5 村が合併して砺波町を新設
S27.6 (1952)	東山見・青島・雄神・種田の 4 村が合併して庄川町を新設
S29.1 (1954)	南般若・柳瀬・太田・東野尻・高波の 5 村が砺波町に編入
S29.3 (1954)	般若・東般若・梅檀野・梅檀山の 4 村が砺波町に編入
S29.4 (1954)	砺波町が市制をしき、砺波市が誕生
S30.1 (1955)	鷹栖村が砺波市に編入
S32.9 (1957)	若林村の一部が砺波市に編入
H16.11 (2004)	砺波市と庄川町が合併、新「砺波市」が誕生

砺波市の市域の変遷図





市域の変遷年表

年月日	合併市町村等	人口(人)	世帯数(世帯)	面積(k㎡)
明治 22 年 4 月 1 日	東砺波郡 出町 誕生	※ 4,497	927	6.01
”	東砺波郡 庄下村 誕生	※ 1,563	271	3.62
”	東砺波郡 中野村 誕生	※ 1,721	310	7.48
”	東砺波郡 五鹿屋村 誕生	※ 2,059	350	4.43
”	東砺波郡 東野尻村 誕生	※ 1,973	358	4.52
”	西砺波郡 鷹栖村 誕生	※ 2,349	389	5.17
”	西砺波郡 若林村 誕生	※ 2,942	478	7.59
”	西砺波郡 林村 誕生	※ 2,504	442	5.74
”	西砺波郡 高波村 誕生	※ 1,667	315	4.92
”	東砺波郡 油田村 誕生	※ 1,664	296	3.95
”	東砺波郡 南般若村 誕生	※ 1,545	263	3.48
”	東砺波郡 柳瀬村 誕生	※ 1,490	255	3.52
”	東砺波郡 太田村 誕生	※ 1,921	328	5.06
”	東砺波郡 般若村 誕生	※ 2,409	493	10.24
”	東砺波郡 東般若村 誕生	※ 2,175	342	5.06
”	東砺波郡 梅檀野村 誕生	※ 2,252	415	9.44
”	東砺波郡 梅檀山村 誕生	※ 1,984	342	14.31
”	東砺波郡 東山見村 誕生	※ 2,908	554	15.30
”	東砺波郡 青島村 誕生	※ 1,408	269	2.28
”	東砺波郡 雄神村 誕生	※ 1,411	289	10.12
”	東砺波郡 種田村 誕生	※ 1,390	249	6.00
昭和 27 年 4 月 1 日	砺波町 誕生 (出町、油田村、庄下村、中野村、五鹿屋村、林村合併)	16,882	3,124	28.79
昭和 27 年 6 月 1 日	庄川町 誕生 (東山見村、青島村、雄神村、種田村合併)	8,282	1,556	30.77
昭和 29 年 1 月 15 日	南般若村、太田村、柳瀬村、東野尻村、高波村編入	25,810		50.24
昭和 29 年 3 月 1 日	般若村、東般若村、梅檀野村、梅檀山村編入	34,475		87.68
昭和 29 年 4 月 1 日	砺波市 誕生	34,475	6,992	87.68
昭和 30 年 1 月 10 日	鷹栖村編入	36,908	6,741	92.85
昭和 32 年 9 月 30 日	若林村(狐島、下中村の一部、西中村の一部)編入	37,904	7,114	*** 96.33
平成 16 年 11 月 1 日	新砺波市誕生 旧砺波市、庄川町合併	*** 49,171	14,217	126.96

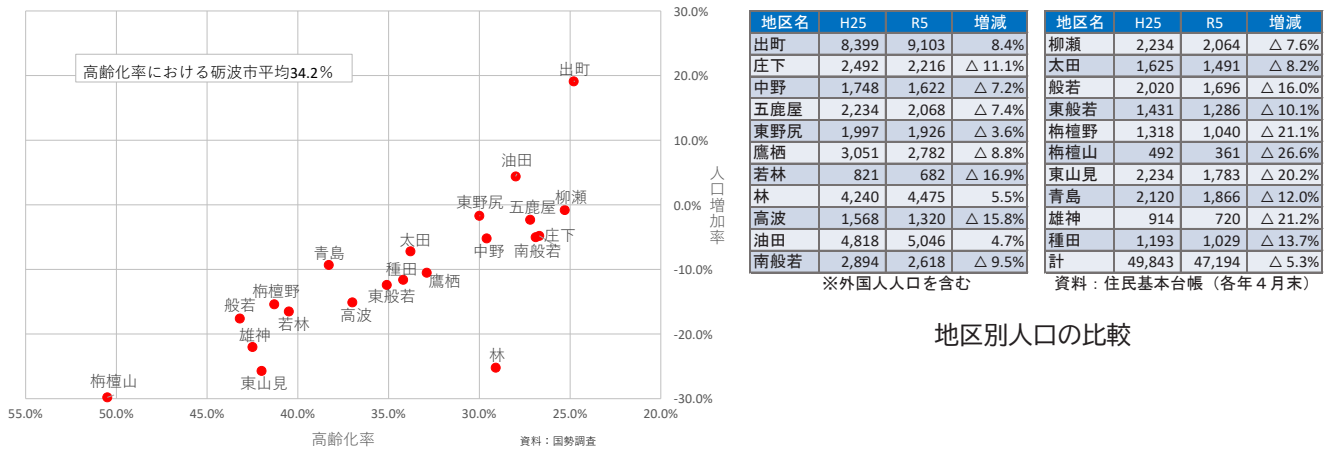
※ 明治 22 年の町村の人口、世帯数は明治 31 年富山県統計による。面積は昭和 25 年富山県市町村勢要覧による
 ※※ 平成 16 年 9 月 30 日での数値
 ※※※ 昭和 32 年 9 月 30 日時点の砺波市の面積は 96.33k㎡であるが、平成 10 年から 96.31k㎡となっている。



(2) 人口

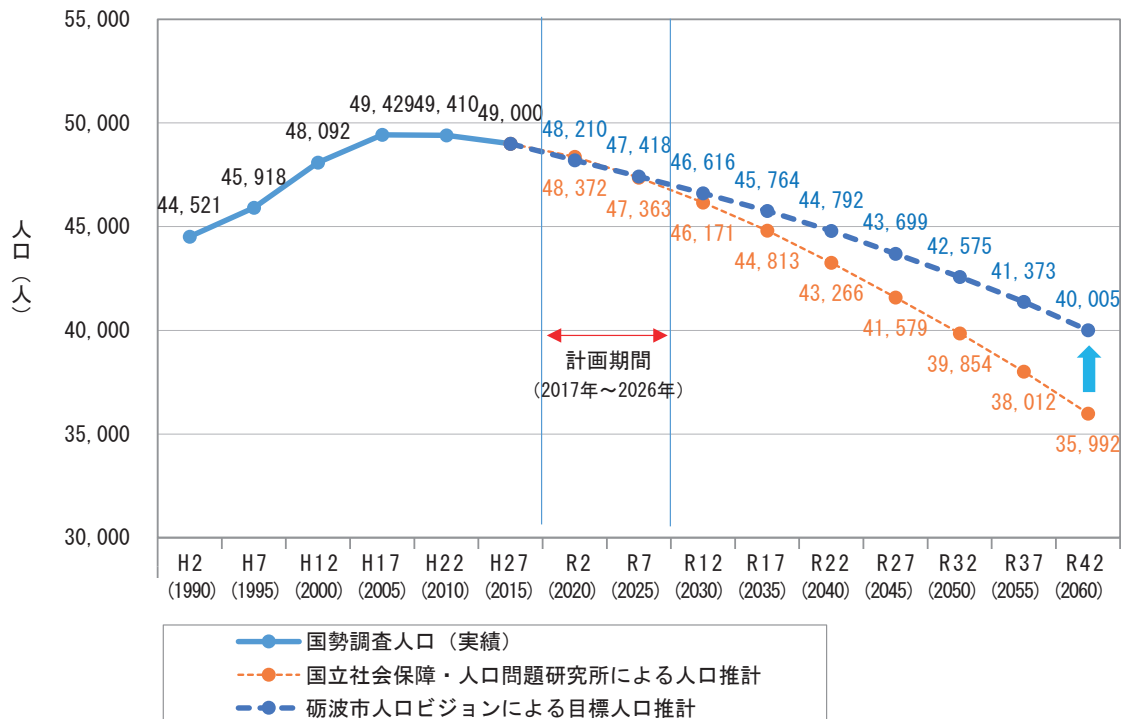
人口ピーク 本市の人口は、令和2年（2020）国勢調査において48,154人となっており、人口のピークであった平成17年（2005）以降、やや減少傾向で推移しています。国立社会保障・人口問題研究所（社人研）による将来推計によると、2040年の人口は43,266人、2060年の人口は35,992人と予測されている中、長期的に人口減少を抑えることで、2040年の人口を目標4万人、2060年の人口を約4万人とすることを本市はめざしています。令和6年（2024）8月現在の人口は、46,790人です。

地区別人口の状況からは、人口増加率が高い地区は高齢化率が低く、人口増加率が低い地区は高齢化率が高い傾向がみられます。地区別人口では、出町、五鹿屋、林、柳瀬地区などで人口が増加する一方、庄東地域、庄川地域などでは人口減少が顕著にみられます。年齢3区分別人口割合では、当面は老年人口が増加する一方で、年少人口及び生産年齢人口の割合は年々減少していくことが予測されるため、文化財の担い手等の不足が懸念されます。



地区別人口の比較

各地区の人口増加率（H22-R2）と高齢化率（R2）の関係



人口の推移及び人口推計・目標人口推計（砺波市2022『第2次砺波市総合計画後期計画』より）

(3) 産業

就業者数をみると、「製造業」「卸売業・小売業」「医療・福祉」が高くなっています。また、特化係数をみると、「農業」「鉱業・採石業・砂利採取業」「製造業」「電気・ガス・熱供給・水道業」「複合サービス事業」等が高くなっています。これらの結果を踏まえると、本市では、就業者数が多く、特化係数が高い「製造業」が基盤産業です。

基盤産業

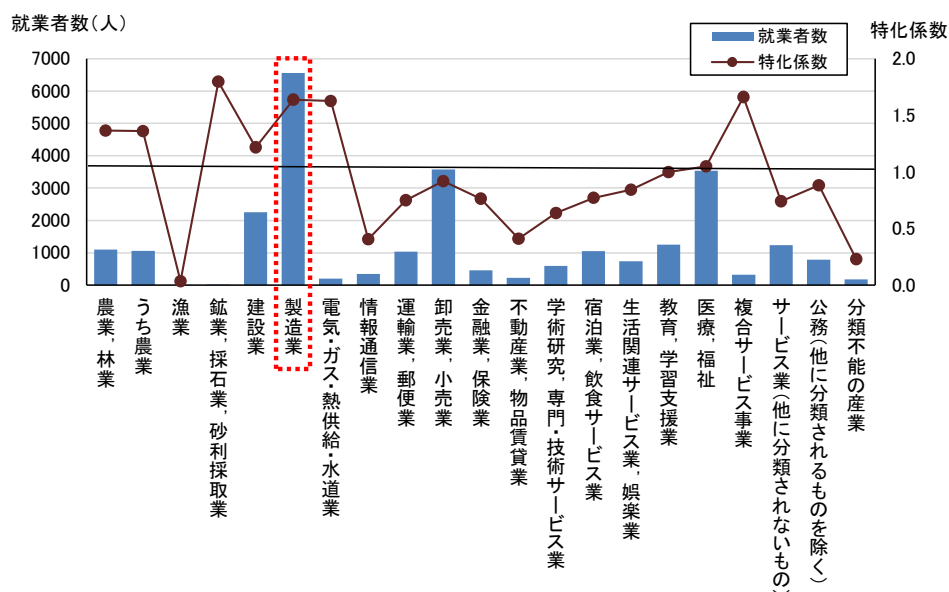
①製造業と商業（卸小売業）

2016年経済センサスにおける稼ぐ力（修正特化係数²）と雇用力（雇用割合）をみると、稼ぐ力のある上位5産業は、「電子部品・デバイス・電子回路製造業」「協働組合（他に分類されないもの）」「農業」「非鉄金属製造業」「家具・装備品製造業」です。

雇用吸収力の高い上位5産業は、「飲食店」「その他の小売業」「飲食品小売業」「社会保険・

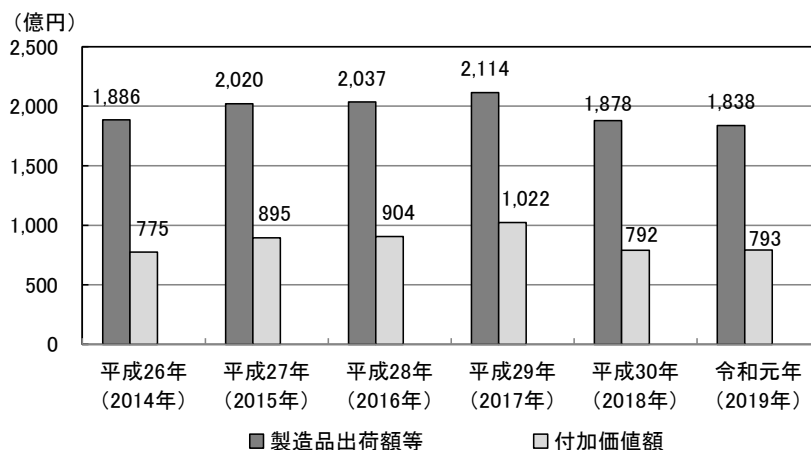
- 1 特化係数：本市の就業者全体に占める産業別の構成比を、全国の産業別構成比で除した数値です。特化係数が「1.0」を超える産業は全国平均と比較して就業者数が多いことになり、特化係数が高い産業ほど相対的な集積が高く、本市の特色を占める産業であるといえます。
- 2 修正特化係数：そのまちなで特化された産業を示す特化係数に輸出入（自足率）による補正を行い、当該産業の世界における強みを表したものの

■砺波市における就業者数と特化係数



■製造品出荷額及び付加価値額の推移

資料：国勢調査（令和2年度）



資料：工業統計（各年12月31日現在）

※ 付加価値額：企業の生産活動によって新たに生み出された価値のこと

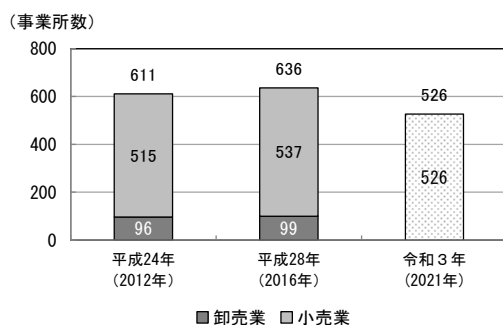


■産業中分類別製造品出荷額等、付加価値額、現金給与総額の状況

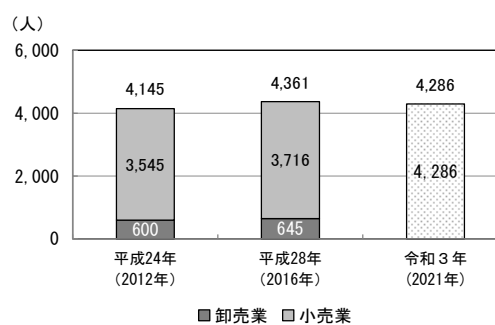
産業中分類	製造品出荷額等 (万円)	粗付加価値額 (万円)	現金給与総額 (万円)
食料品製造業	891,628	376,128	127,801
飲料・たばこ・飼料製造業	2,970,484	667,250	121,694
繊維工業	528,306	232,981	114,909
木材・木製品製造業(家具を除く)	105,157	44,048	22,550
家具・装備品製造業	547,001	184,697	98,763
パルプ・紙・紙加工品製造業	X	X	X
印刷・同関連業	345,865	150,072	37,730
化学工業	X	X	X
石油製品・石炭製品製造業	X	X	X
プラスチック製品製造業(別掲を除く)	524,440	244,258	96,991
窯業・土石製品製造業	517,113	225,700	95,435
鉄鋼業	X	X	X
非鉄金属製造業	3,117,675	623,388	197,008
金属製品製造業	1,183,742	450,475	215,411
生産用機械器具製造業	477,021	254,959	115,452
電子部品・デバイス・電子回路製造業	6,422,541	4,153,434	740,471
電気機械器具製造業	X	X	X
輸送用機械器具製造業	310,285	142,451	111,407

資料：工業統計（令和元年（2019年）） ※Xは秘匿値

■卸小売業における事業所数の推移



■卸小売業における従業者数の推移



資料：総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」
※ 令和3年は速報値（卸売業・小売業の合計値のみ）

社会福祉・介護事業」「総合工事業」となっています。特に「電子部品・デバイス・電子回路製造業」で稼ぐ力、雇用力ともに高くなっています。

卸小売業における事業所数と従業者数の推移をみると、いずれも平成28年（2016）から減少に転じています。（砺波市2023『第3次砺波市商工業振興計画』）

②農業

本市の農業は、豊富な水と早くから整備された農業基盤を有効に活用し、水稻を中心とした水田農業が営まれており、水田面積は、4,760ha（令和4年度）とほぼ横ばいで推移しています。

農家数は、1,082戸（令和2年農林業センサス）で前回1,566戸（平成27年農林業センサス）から484戸減少しており、集落営農の組織化や担い手への農地集積が進んだこと等により農家数は減少しています。

さらに、農業者の高齢化が進んでおり、農業就業人口に占める高齢者（65歳以上）の割合は85.6%と高まってきており、担い手不足が顕在化しています。

また、担い手への農地集積率は着実に伸びており、令和5年（2023）4月における集積率は76%を超えていますが、受け手の少ない地域やほ場条件の悪い地域では集積が進まず耕作



放棄地の増加が懸念されています。

農業産出額は、米に大きく依存した構造となっていることから、近年は、米以外の地域振興作物（チューリップ球根、たまねぎ等）との複合経営へ転換を図られた農家も見られるように複合経営なっています。

しかし、農家所得に占める農業所得の割合（農業依存度）は年々減少し、農外所得に依存した農家経済となっています。

③漁業

本市の漁獲量の大部分はアユによって占められ、その量は全体の95%以上にのびます。庄川のアユ漁は毎年6月から11月末までが解禁で、その他の期間は禁漁となっています。アユの他の魚種ではニジマス、ヤマメ、コイ、ウグイ、ウナギ、サクラマスなどがあります。

年	アユ	ニジマス	ヤマメ	イワナ	コイ	ウグイ	ウナギ	サクラマス
2018	1442.5	2	13	0	9	0	3	3
2019	1220.3	0	0	0	0	49	6	11
2020	1423.3	0	0	0	5	26	6	0
2021	1314.3	2	0	0	3	36	4	0
2022	1190.1	0.5	0	0	0	36	1	0

砺波市の漁獲量一覧
(砺波市漁業協同組合漁獲高より作成)

④林業

本市の面積12,703haのうち森林面積は3,470haで市域の27%を占め、そのほとんどが民有林です。森林資源を表す材積は998千m³、1ha当りの材積は228m³となっています。森林整備や林業コストの低減に必要とされる林道及び作業道は、176路線、約180kmが整備されており、1ha当たりの路網密度は約52mとなります。

近年では、従来からの補助事業による取り組みを進めながら、「県民参加の水と緑の森づくり事業」を積極的に活用し、森林整備や基盤の整備等の支援を図ってきました。

本市は、森林面積が5ha未満の小規模所有者が多数を占めていることから、計画的で効率的な森林施業の実施が困難な状況にあり、施業の集約化を重点的に進めています。また、既存の市民団体の森林整備活動についても積極的に推進し、支援をしています。

森林・林業をめぐる状況ですが、再生産が可能で二酸化炭素の吸収・固定につながる人工林の多くが間伐等の手入れの必要な林齢から木材として利用可能な林齢となっています。しかしながら、林業収益性の低下を反映して、造林や素材生産活動が低迷を続けていること、山村地域の過疎化や林業就業者の減少と高齢化、地形等の制約による林業機械の導入の遅れや生産基盤の整備・木材等の流通・加工体制が脆弱であるため、取り巻く環境は厳しくなっています。

(『砺波市森づくりプラン《砺波市森林整備計画》』)

⑤観光

本市には、県下有数の一級河川の庄川が流れる砺波平野に位置し、東南部には三条山から鉢



伏山、牛岳など標高約 300～1,000m の山々が連なり、豊かな自然に生まれ、人々の生活に結びついた観光資源が存在しています。庄川がつくる扇状地には、扇頂部に灌漑水の源があり、扇中央部には肥沃な農地に「カイニョ」とよばれる屋敷林が点在する典型的な散村（散居村）が広がり、古くから稲作が行われてきました。良質種もみの県外向け受託生産量が日本一となっています。稲作を育んだ散村景観は国内でも有数の規模を有し、鉢伏山にある散居村展望台は撮影スポットとして人気を集めています。

散居村展望台

チューリップ

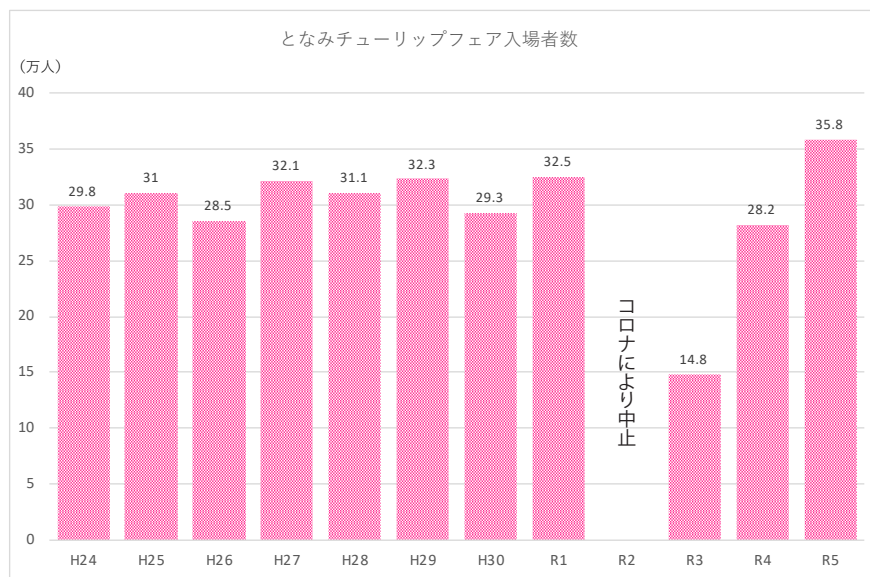
球根栽培

子供歌舞伎

大門素麺

庄川温泉郷

扇中央部では、稲作とともにチューリップの球根栽培が盛んで、日本一の出荷量を誇ります。また、県を代表するイベントである「となみチューリップフェア」をはじめ、頼成の森花しょうぶ祭り、となみ夢の平コスモスウォッチング、チューリップ公園 KIRAKIRA ミッションといった多種多様なイベントが行われています。伝統的な行事としては、出町子供歌舞伎曳山、庄川観光祭、となみ夜高まつり、厄払い鯉の放流などがあります。特産品はチューリップの球根や切花をはじめ、種もみ、大門素麺、庄川挽物木地、庄川ゆず、三郎丸蒸留所ウイスキー、金屋石、庄川鮎などがあります。また、庄川峡や庄川温泉郷の豊かな自然や文化に育まれてきた地域資源にも恵まれています。



となみチューリップフェア入場者数のグラフ



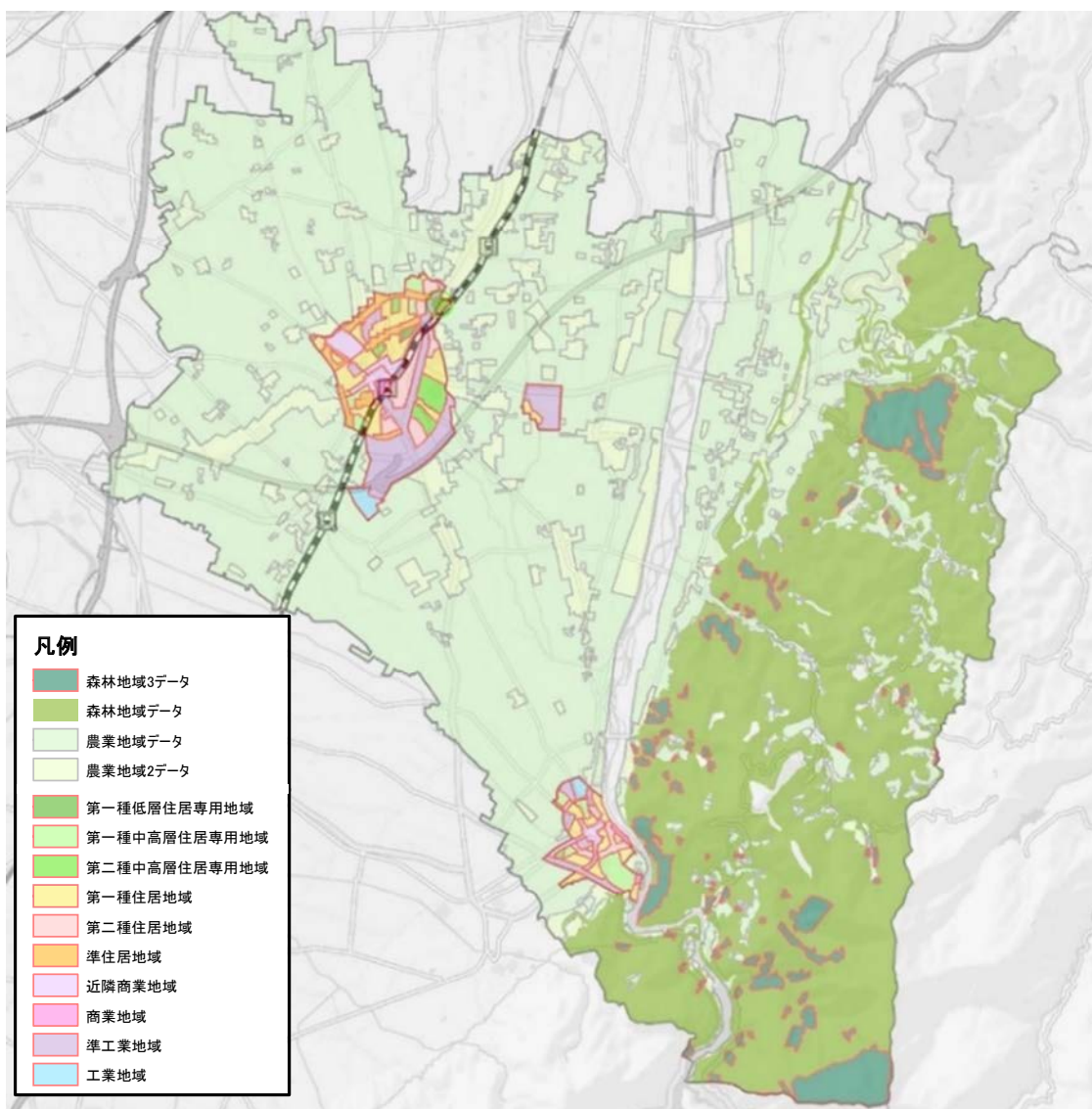
(4) 土地利用

平野部はJR城端線沿線の出町地区や油田地区、旧庄川町の中心部である東山見地区や青島地区に市街地を形成し、その周辺に広がる田園地域に集落が分布しています。庄川右岸地域には、森林が多く分布しています。

都市計画区域内は、出町地区及び東山見地区、青島地区に用途地域が指定されています。出町地区は主に商業地域や準工業地域に指定されており、東山見地区及び青島地区は主に住居地区に指定されています。

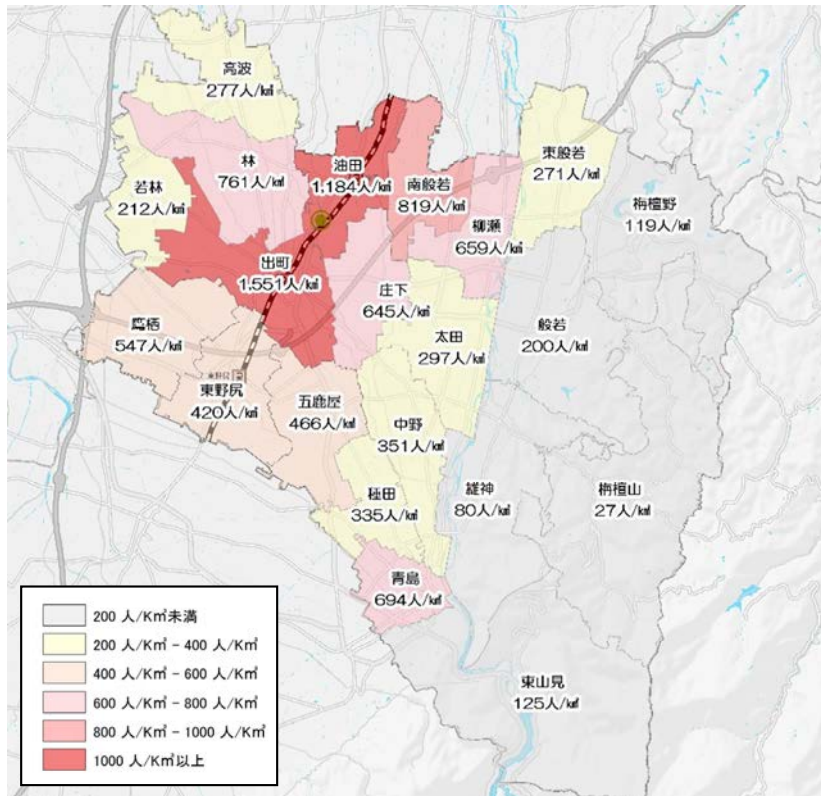
地区別人口は、市街地の出町地区が8,921人で最も多く、次いで油田地区が4,921人、林地地区が4,467人となっています。一方、山間部の梅檀山地区(358人)や雄神地区(711人)、平野部では若林地区(676人)の人口が少なくなっています(令和5年8月末現在)。

地区別人口密度は市街地の人口密度が高く、庄川右岸地域の人口密度が低くなっています。

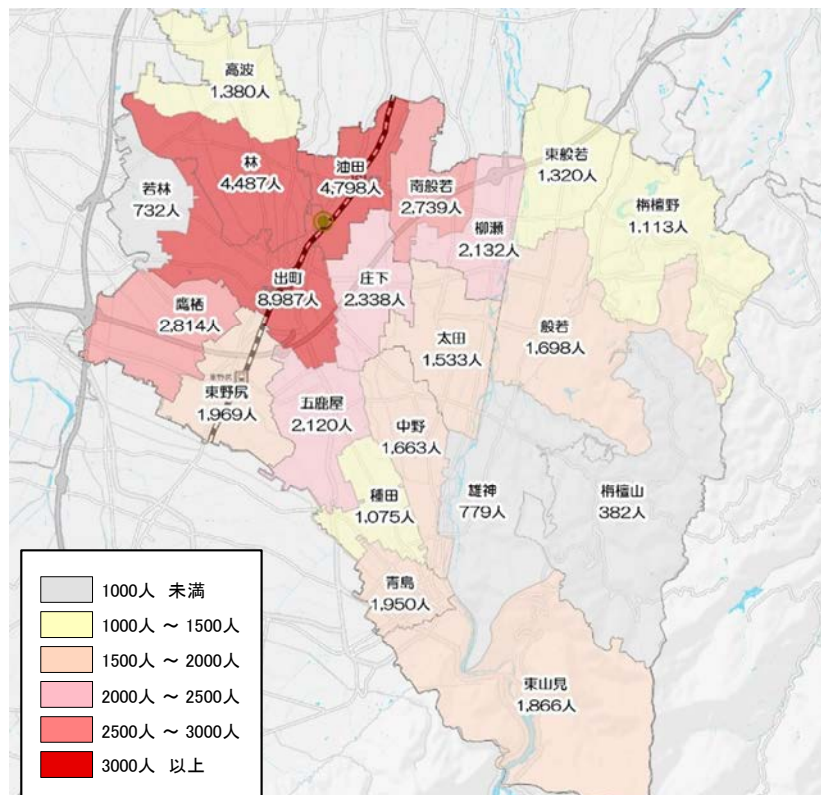


用途地域図
(国土数値情報 H28 より)



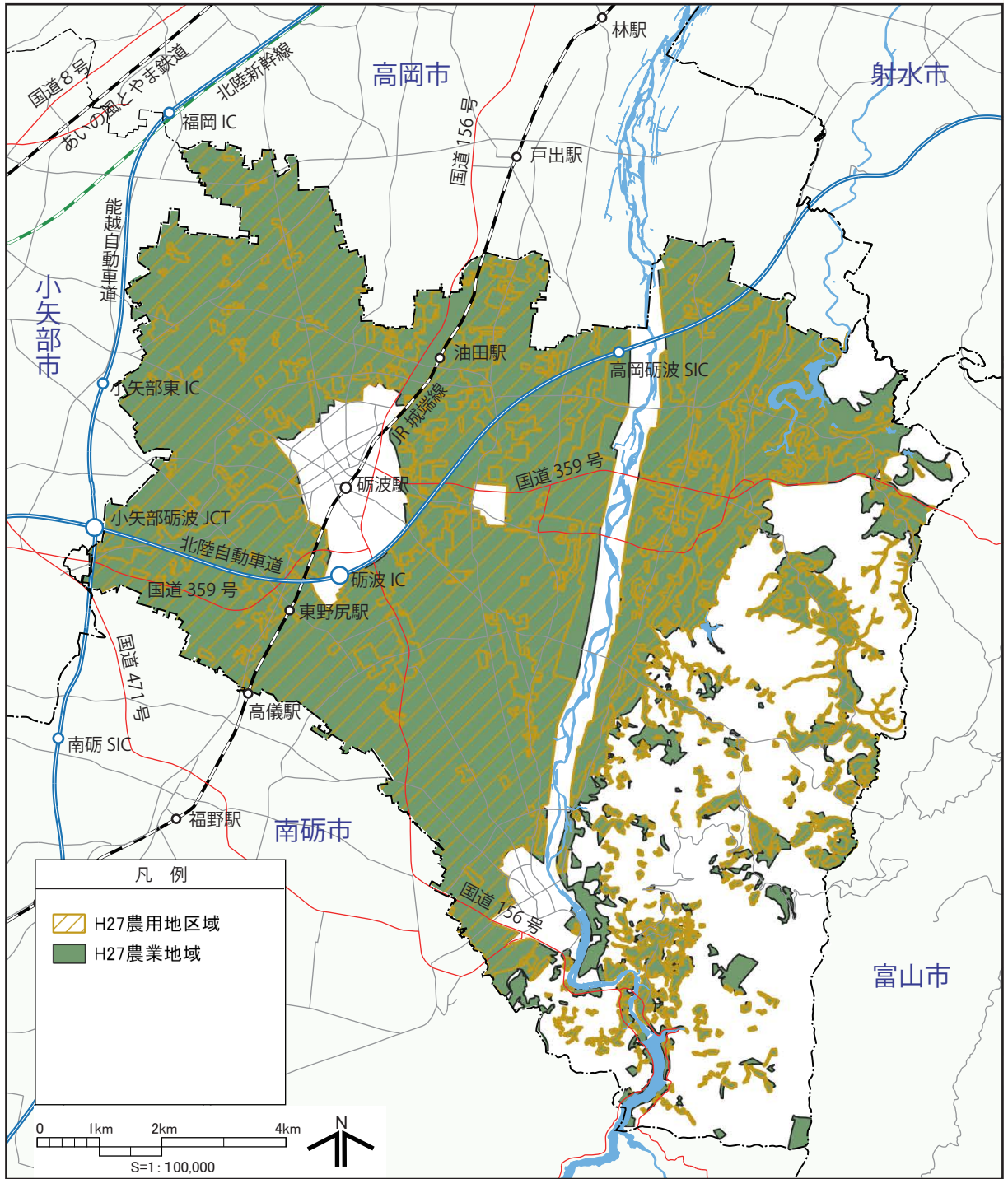


地区別人口密度（令和3年）
 （砺波市住民基本台帳人口：令和3年3月末現在）



地区別人口数（令和3年）
 （砺波市住民基本台帳人口：令和3年3月末現在）





砺波市の農業地域図

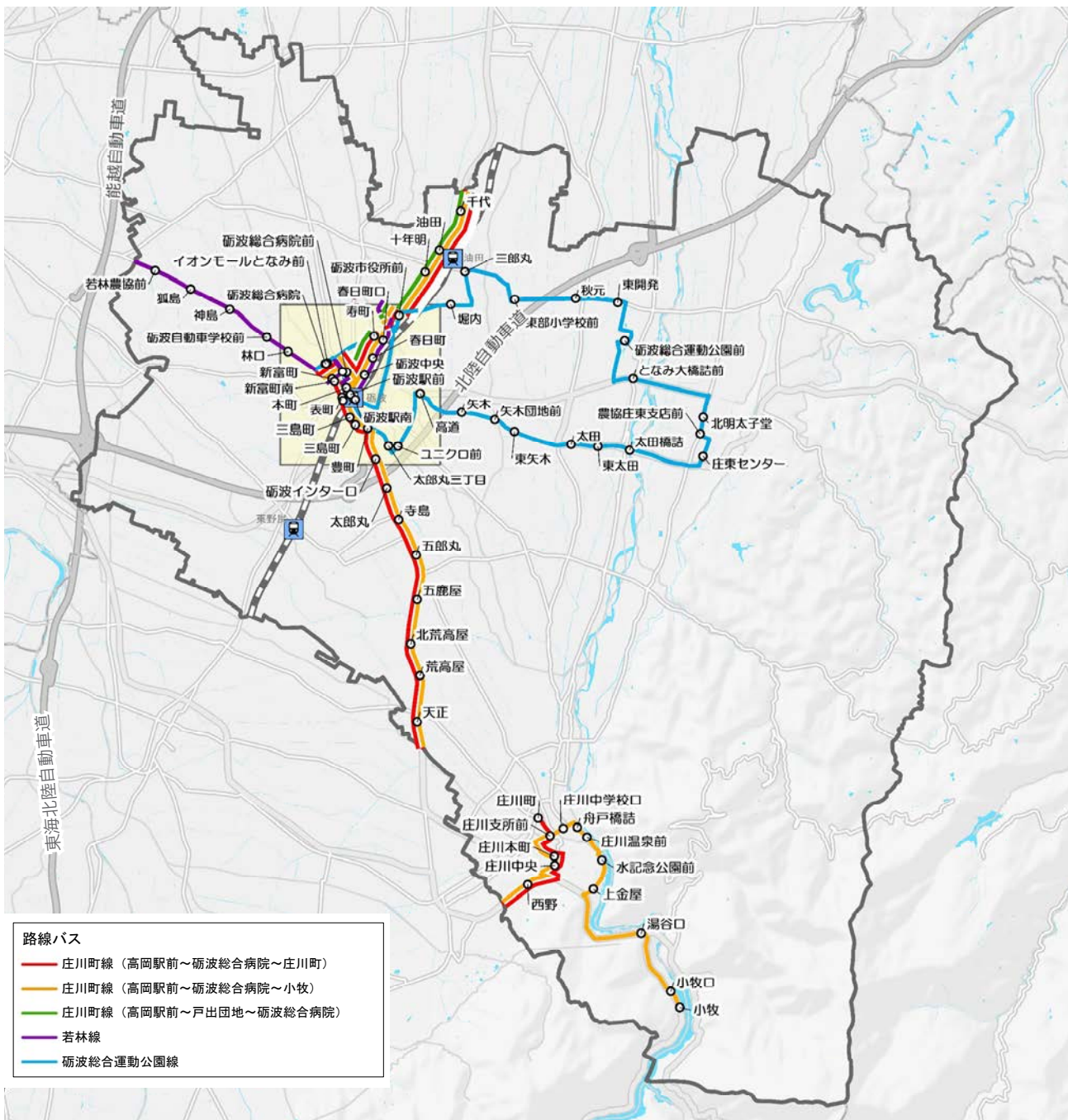


(5) 交通

高速道路 本市の道路交通体系の骨格は、高速道路では北陸自動車道・東海北陸自動車道・能越自動車道、国道では156号と359号によって形成されています。また、高速道路には砺波ICと高岡砺波スマートIC、高速道路の交差部には小矢部砺波ジャンクションが設置されています。

鉄道 公共交通体系のうち、鉄道については、JR城端線が市域を斜めに縦断しており、市内には油田駅、砺波駅、東野尻駅の3駅があります。

バス バスについては、高速バスが7路線運行されています。路線バスは3路線が運行されており、高岡市と砺波市を結ぶ庄川町線、小矢部市と砺波市を結ぶ若林線、市内を運行する砺波総合運動公園線があります。市営バスは8路線が運行されており、各地区と中心市街地を結ぶ区間で



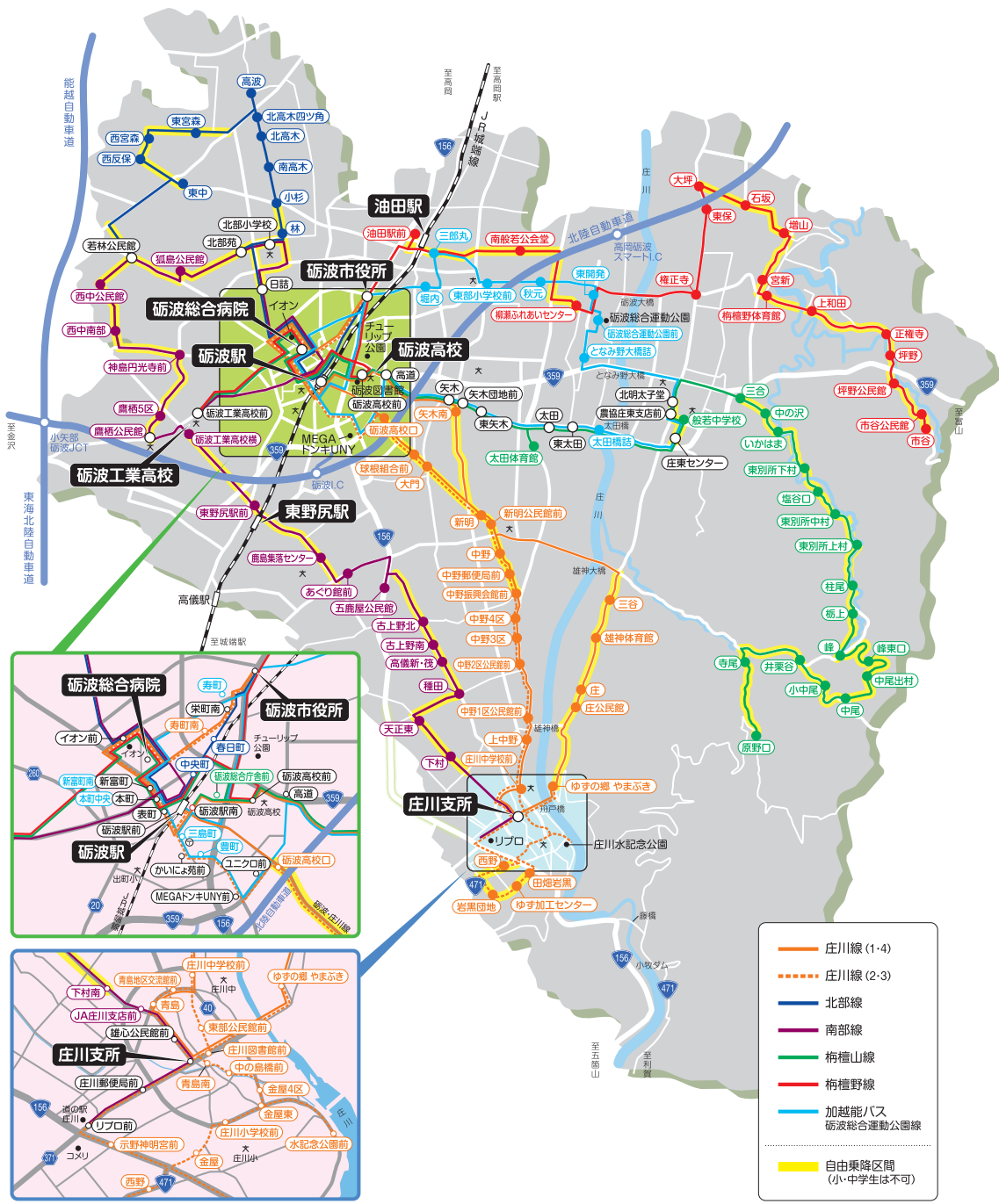
市内の地域公共交通網図 (1)

(『砺波市地域公共交通計画』)

1日あたり2～6便運行されています。

デマンド型乗合交通「チョイソコとなみ」は、自宅前に迎えがきて、指定停留所で乗降する
 乗り合い送迎サービスであり、月曜から土曜まで1日あたり6便運行しています。

このように、本市には各種の交通体系が形成されているものの、移動手段の多くを自動車
 が占めており、自動車に依存している状況にあるため、鉄道やバスなどの公共交通を移動手段と
 して利用する割合は全体として低い傾向にあります。しかし、少子高齢化が進行する中、高齢
 者の移動手段の確保や小中高生の通学手段の確保等の課題を解決するため、デマンド型乗合交
 通「チョイソコとなみ」など新しい公共交通の利用促進が求められています。



市内の地域公共交通網図 (2)

(『令和6年4月1日改正砺波市市営バス運行路線図』を一部改変)

(6) 文化財に関連する施設

登録博物館 登録博物館である砺波郷土資料館は、本市の歴史文化や民俗に関する資料の収集・保存、展示・普及啓発、調査・研究をおこなっています。散村景観が特色でもある本市には、展示・普及啓発活動をおこなうとなみ散居村ミュージアムに、調査・研究活動をおこなう砺波散村地域研究所が併設されています。

茅葺き屋根 曳山 3 基 散村を構成する家屋として保存されているのが、出町地区にある旧中嶋家とかいによ苑（旧金岡家住宅）です。いずれも茅葺き屋根住宅で、市指定文化財になっており、江戸時代中期・後期の砺波地方の大型農家住宅の姿を体感することができます。砺波市出町子供歌舞伎曳山会館では、県指定文化財である出町子供歌舞伎曳山で使用する曳山 3 基を展示するとともに、獅子舞や夜高祭りを紹介しています。

増山城跡 般若地区にある砺波市埋蔵文化財センター（愛称：しるし）では、市内の遺跡から出土した考古資料を展示しつつ、小学生を対象に体験イベントを定期的におこなっています。梅檀野地区にある国指定史跡増山城跡のそばに、城の紹介と休憩施設をかねた増山陣屋があります。その近くには、多くの文化財を所蔵する古刹千光寺があります。

油田地区にある若鶴酒造の大正蔵は、砺波市ふるさと文化財に登録されています。敷地内に

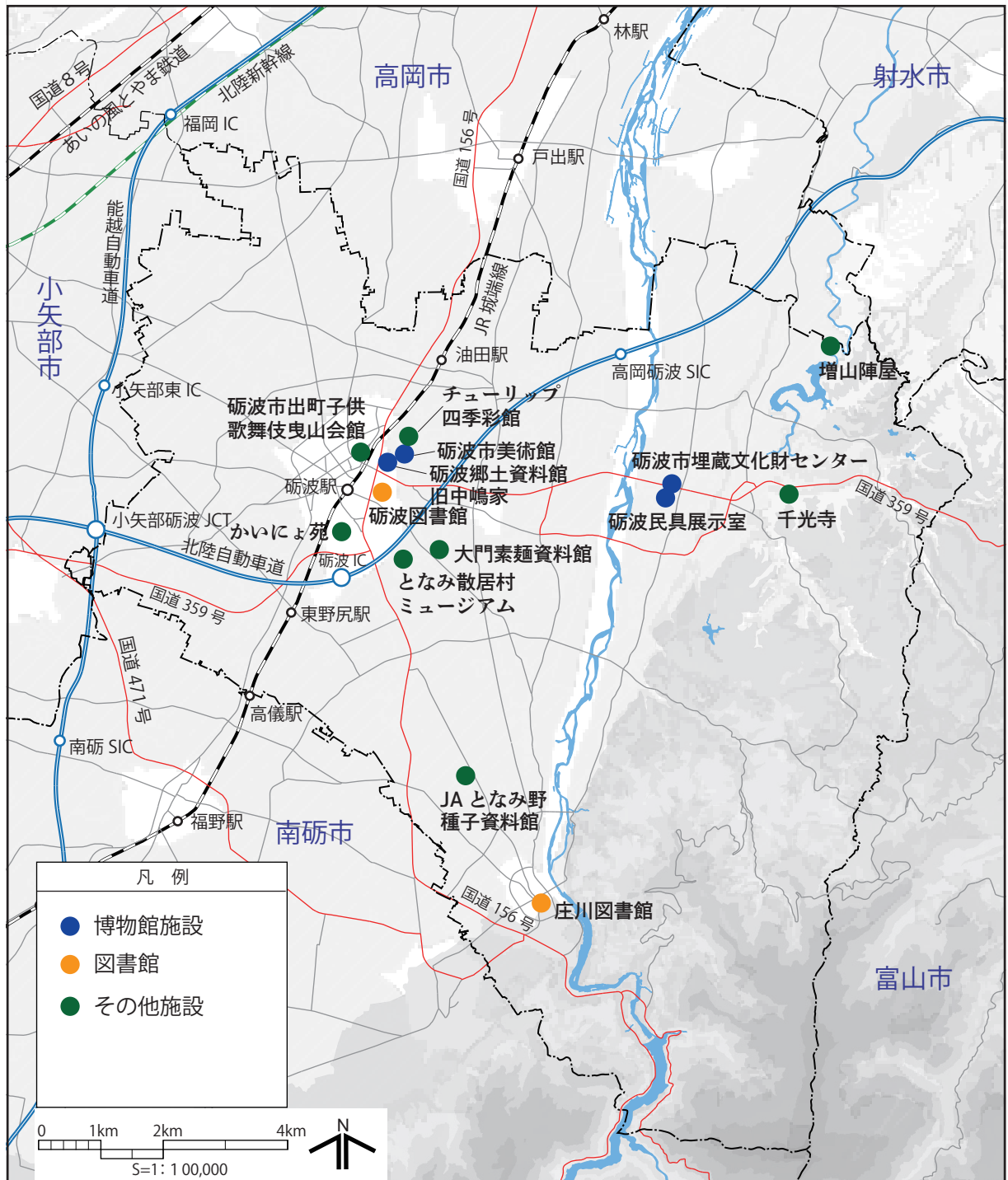
施設名	運営主体	建築（開館）年度		備 考
		和暦	西暦	
砺波市出町子供歌舞伎曳山会館	砺波市	平成 21	2009	200 年を超える「出町子供歌舞伎曳山」の三基の曳山を中心に、資料や衣装・小道具類の展示公開と、豊かな祭文化を紹介
砺波市美術館	砺波市	平成 9	1997	チューリップ公園東に隣接。「アートスペース砺波」、「となみ野美術展」などの活動を継承した文化的創造活動の拠点
かいによ苑	砺波市	平成 15	2003	砺波市指定文化財（旧金岡家住宅）。「かいによ」（屋敷林）をもつ散居の農家の姿を後世に伝える。生涯学習の場として活用
砺波市埋蔵文化財センター	砺波市	平成 27	2015	砺波市を代表する考古資料を子どもにわかりやすく展示。組紐作りやペーパークラフト制作などの体験ができる。
砺波民具展示室	砺波市	平成 27	2015	砺波市立庄東小学校 3 階フロア全体を使用した博物館。砺波地方の民具約 7,500 点を収蔵展示
増山陣屋	砺波市	平成 25	2013	増山城跡のパンフレットやパネル展示があるトイレ付き休憩所
砺波郷土資料館	砺波市	明治 42 昭和 58 (開館)	1909 1983(開館)	砺波市指定文化財（旧中越銀行本店）。明治洋風建築の代表的な建物。昭和 54 年にチューリップ公園内に移築
旧中嶋家住宅	砺波市	18 世紀中ごろ		砺波市指定文化財。18 世紀中ごろの建築で、この地方の古い農家の様式を示す典型的な建物。昭和 51 年にチューリップ公園内に移築
となみ散居村ミュージアム	砺波市	平成 18	2006	となみ野田園空間博物館の中核施設で、4 館からなる博物館。民具館（H21 開館）には明治期から昭和 30 年ごろまでの民具を展示
千光寺	千光寺	昭和 45	1970	真言宗寺院。開基 大宝 3 年（703 年）砺波地域でもっとも古い寺とされ、閻魔像を安置する寺としても知られている。
入道家住宅	個 人	嘉永 6	1853	富山県指定文化財。屋敷林をそなえた大規模民家。砺波平野の散村に多くみられるアズマダチ建築の典型例として貴重な建築
チューリップ四季彩館	砺波市	平成 8	1996	砺波チューリップ公園に隣接し、富山県の県花、砺波市の市花であるチューリップの情報発信の拠点。園芸講座やボランティア・緑化活動を実施
JA となみ野種子資料館	JA となみ野	平成 21 (開館)	2009 (開館)	特産の種もみを PR する施設として開館。資料館は資料室と検査室があり、資料室では、種もみ生産の歴史や明治時代からの種もみ品種、収穫から出荷までの行程などをパネルで分かりやすく紹介
大門素麺資料館	庄下自治 振興会	平成 30 (改修)	2018 (改修)	旧正行寺（砺波市大門）本堂跡に、砺波市の特産「大門素麺」に関する資料や道具を保存・展示。そうめん作りの工程を精巧に再現したジオラマ人形も並べ、大門素麺の歴史と作業内容を分かりやすく紹介
三郎丸蒸留所	若鶴酒造（株）	平成 29	2017	文久 2 年（1862 年）より酒造業を営む若鶴酒造が 1952 年よりウイスキーを製造してきた蒸留所を改修し、2017 年に「三郎丸蒸留所」としてオープン。蒸留所の歴史や製造工程に関する展示や、世界的にも珍しい鋳型製蒸留器を間近で見られる見学ツアーを実施

文化財関連施設一覧



あるウイスキー蒸留施設である三郎丸蒸留所とともに常時見学ツアーの受け入れをおこなっており、産業観光ができる施設として注目されています。素麺生産が盛んな庄下地区には、大門 大門 素麺 素麺資料館があり、道具が展示されています。東山見地区の庄川水記念公園ふれあいプラザには、庄川に関する資料が展示されています。種もみの生産が盛んな種田地区には、JA となみ野種子資料館があり、種もみ生産の歴史や収穫から出荷までの工程を学ぶことができます。

また、砺波図書館・庄川図書館には歴史資料が収蔵されています。



文化財関連施設位置図



3 歴史的背景

(1) 旧石器・縄文時代 -約2万年前からの人々の営み-

遊動生活のはじまり 市内の歴史は2万年前の旧石器時代から始まりますが、獲物を追って移動する遊動生活が続く間は、人々の活動は細々としたものでした。縄文時代中期の遺跡はたくさん見つかりますが、その後は少なくなっていきます。

立野ヶ原 砺波平野周辺における旧石器時代の遺跡は、小矢部川上流域の立野ヶ原台地一帯（南砺市）に集中して分布しています。市内では庄川右岸の庄東山地から芹谷野段丘にかけて遺跡が点在し、畑地などの地表に石器が散布した状態で見つっています。芹谷遺跡では、これまで100点以上の石器が採集されています。その石器は「立野ヶ原型ナイフ形石器¹」と呼ばれる小形剥片や、ナイフ形石器などで構成されています。石器の年代は、約2万9千～2万5千年前の巨大噴火で噴出した火山灰である始良丹沢（AT）火山灰の降灰期に相当します。そのころから段丘や山地で人々の営みが始まったのでしょう。

花ひらく縄文文化 市内では、芹谷野段丘の東を中心に縄文遺跡が濃密に分布していますが、平野部にもわずかに所在します。芹谷野段丘では^{ごんしようじ}厳照寺遺跡などが、和田川流域の段丘帯には高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などがあります。

縄文時代の始まりである草創期は、福山大堤遺跡で表採された石器が唯一の資料として知られています。この石器は、濃飛流紋岩類という石材でつくられた「半月形石槍^{はんげつがたせきそう}」とよばれるものです。これは両面が加工されている半月形の打製石器で、縄文時代のもっとも古い段階にみられる石器です。

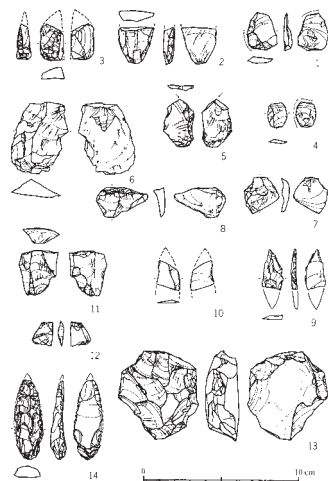
前期は増山遺跡などでわずかに出土例がありますが、県内の他の縄文遺跡と同じように、中期に属する遺跡は多く見つかります。

芹谷野段丘の縁にある厳照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡としてもっとも

1 奥村吉信 1987「立野ヶ原石器群と米ヶ森技法」『大境』第11号 富山考古学会

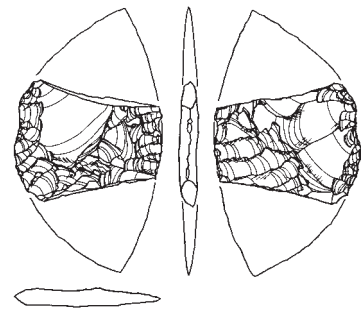


旧石器時代のイメージイラスト



芹谷遺跡の石器
1:2
ナイフ形石器(1~4,9,10) 剥片(5~8)
梨形石器(11,12) 石槌(13)
槍先形剥片(14) 彫器(15)

芹谷遺跡の石器



福山大堤遺跡の石槍
1:2

福山大堤遺跡の石槍



厳照寺遺跡の近景

著名な中期の遺跡です。出土した土器は、縄文土器の年代的序列をあらわす編年「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の標式となっていました²が、現在は「新保・新崎式」に含まれています。遺構では、竪穴建物跡 11 棟・埋甕 1 箇所・穴などが検出され、弓のように住居が配置される「弧状集落」であることがわかりました²。弓のように建物を配置することで、集落の中心に広場をつくられました。この広場は公共的な空間で、さまざまな営みが行われていました。

標式遺跡

弧状集落

また、低地の扇状地上では、芹谷野段丘をえぐる谷口付近に遺跡があるほか、扇状地扇中央部に遺跡が点在します。久泉遺跡では打製石斧が多く出土していますが、これは自然薯やユリの根などの根菜類を掘る際に使った道具とみられます。これまでに扇中央部の集落は未発見なので、おそらくふだんは段丘上や山地で生活し、食料を求めて扇中央部に来ていたとみられます。

掘る道具

扇中央部とは異なり、扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落である松原遺跡があります。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・遺構の質・量ともに豊富な遺跡として知られています。大きな川の近くにあり、山にも近いことから食料採集に適していたとみられます。

竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸 11m をこえる大型建物など 10 数棟が見つかっています³。04 号竪穴建物からは、多くの土器とともに打製石斧、磨製石斧、石錘、擦石、石鏃が出土しています。石錘という網のおもりが多いので、川で魚を獲って生活していたのでしょう。土器は、中期前葉から中葉（新崎式～上山田・天神山式）が主体を占めます。洪水の影響がない河岸段丘上という立地や、庄川に近く漁労活動で生計をなした³こと、そして五箇山・飛騨に通じる交通の要衝に位置したことなどの条件が揃っていたことが、拠点集落化した要因とみられます。

拠点集落

縄文時代では、中尾遺跡から出土した御物石器が市指定文化財として福岡の厳照寺で保管されています。この石器は祭祀のための道具か、死者を葬る儀礼に使われたとみられます。

2 富山県教育委員会 1977 『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』

3 庄川町教育委員会 1975 『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』



松原遺跡出土の縄文土器



中尾遺跡出土の御物石器



松原遺跡のイメージイラスト



(2) 弥生時代・古墳時代 -空白の時代-

稲作の伝来 弥生時代の遺跡はほとんどありません。なぜなら、稲作が伝来したことで、人々の生活する場所が水を得にくい扇状地から扇端部の湧水帯に移ったからだといわれます。福山大堤遺跡や安川野武士A遺跡B地点、増山城跡出土の弥生土器がありますが、その量はごくわずかです。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在する黒色土（マッド）上などに未発見の遺跡が存在する可能性があります、総量は多くはないでしょう。

弥生土器

少ない古墳 和田川のそばにある高沢島Ⅲ遺跡では、古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土しています。また、増山城跡内の又兵衛清水付近からは、古墳時代の土師器片が出土しています。池原には“丸山古墳” やかつて県指定史跡であった“狐塚古墳” がありますが、前者は現在古墳と見る研究者は少なく、後者は中世に築かれた墳墓である可能性があります。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にあり、市域のある平野東部には古墳時代の遺跡はきわめて少ないのが現状です。

(3) 奈良時代・平安時代 -米づくりのはじまり-

弥生時代から古墳時代にかけての空白期間ののち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が確認できます。いずれの遺跡も8世紀半ば以降で、それ以前の遺跡はほぼありません。これは、天平15年(743)に墾田永年私財法が発布されたことをきっかけに、平野東部に東大寺領荘園が成立した動きに連動したものと考えられます。そのときつくられた荘園は石粟荘、伊加流伎荘、井山荘、杵名蛭荘の四荘です。

東大寺領荘園

志留志の台頭 このころ、在地豪族である利波臣志留志は、天平19年(747)、東大



志留志のイメージイラスト



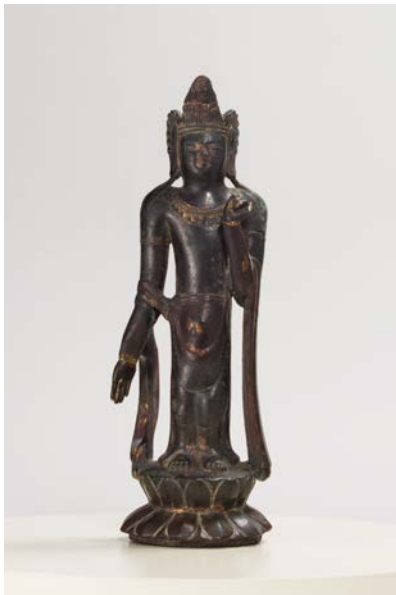
久泉遺跡の大溝跡



徳万頼成遺跡の畦畔跡



東大寺大仏殿



銅造観世音菩薩立像（千光寺）

寺大仏建立にさいして米3,000碩（約1,200石）を寄進して「外從五位下」の位を受け、神護景雲元年（767）にはさらに墾田100町を献じて「從五位上」の位を授かり、越中員外介（現在の副知事に相当）に任じられました。そして、東大寺莊園の檢校には專当国司として名を連ねていることから、莊園の成立や経営に大きな役割を果たしていたとみられます。志留志は宝龜10年（779）には伊賀守に任じられています。その後、利波臣一族は平安時代前期にかけて、砺波郡の郡司として権勢を誇りました。

伊賀守

「万葉集」によると、天平勝宝2年（750）、越中国司である大伴家持は東大寺莊園を点検するために砺波郡をまわり、「やぶなみの里」の多治比部北里の家に泊まっています。北里は砺波郡の郡司主帳

大伴家持

をつとめた人物です。天平宝字3年（759）の「石粟村官施入田地図」の東に「從荊波往紵道」とあることから、紵と荊波の集落が石粟村の南に位置すると考えられ、やぶなみの里は現在も同名の神社がある市内の池原にあったとみられます。したがって北里の家もそのあたりにあったとおもわれます。

石粟村

天平宝字3年（759）の「伊加流伎野地開田地図」に「木波道」と書かれていますが、それより南にあった井山村の神護景雲元年（767）の地図にも南北に通じる道があり、南は「往木波村道」とあります。これによって、木波村の北に井山村があり、さらにその北に伊加流伎野（伊加流伎莊）が位置していたことがわかります。木波の地名は、庄川の流入により現在は失われていますが、中世から近世初頭にかけての文書に「木波郷」「木並郷」がみえ、雄神神社旧社地（弁財天社）の北あたりと推定されています。

木波村道

伊加流伎野

古代寺院としては、芹谷山千光寺が知られています。千光寺は大宝3年（703）天竺

4 外位。律令制において地方官に授けられた、五位から初位までの20階の位の一つ。

5 内位。律令制において中央官司などに授けられた、正一位から少初位下までの30階の位の一つ。

6 莊園の役人

7 ある事項の処理を特定の国司の責任とする場合には、專当国司と称した。

8 律令制において郡などの文書の起草・受理をつかさどった役職。



増山城跡二ノ丸の神水鉢



荊波神社



千代遺跡の墨書土器



の僧法道の開基と伝えられており、白鳳時代の小金銅仏である銅造観世音菩薩立像が安置されています。ほかには厳照寺の境内から瓦が出土していたり、増山城跡二ノ丸に塔心礎とおもわれる神水鉢があり、古代寺院が千光寺以外にも存在した可能性があります。

砺波七座 延喜式内社としては砺波郡に七座ありますが、市域には、荊波神社、林神社、比賣神社、雄神神社の四座があります。雄神神社は水の神である高麗を主神とする古社で、神護景雲元年の井山村墾田地図に「雄神分」として神田が記されています。雄神神社は延暦14年(795)に高瀬神・二上神とともに従五位上に叙せられています。「万葉集」にみえる雄神河(庄川の古名)はこの神名に由来するとおもわれます。のちに雄神庄が設定されて「庄」が地名となり、川名を庄川と呼ぶようになったと考えられます。

奈良時代 奈良時代の遺跡は数多く確認できます。芹谷野段丘上にある宮森新北島Ⅰ遺跡⁹では、桁行3間×梁間2間、面積32㎡の掘立柱建物が検出されています。また、平野部では、高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元窪田島遺跡、宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地のマッド上に存在しています。周囲より少し高い場所に集落をつくっていたようです。

古代の役所 **久泉遺跡の大溝** 平野中央にある久泉遺跡では、長大な大溝と建物遺構群などが検出されていますが¹⁰、遺跡の存続時期は8世紀後半から9世紀前半と100年もありません。建物は規則的に配置された掘立柱建物4棟と大小さまざまな規模の竪穴建物14棟で構成されます。建物の長軸方向(桁行)が10mを超える掘立柱建物の規模や、整然と並ぶその配置は古代の役所の要素も含まれます。加えて、竪穴建物の一部には鍛冶工房と思われ、単なる一般的な集落と評価することはできません。また、大溝は、溝底から8世紀第Ⅲ四半期に帰属する須恵器(有台杯)が出土しており、その時期に開削されたと考えられます。大溝は発掘によって幅6.9~10m、最深部1.55m、延長120mを検出しましたが、地中レーダ探査により約2.0kmの延長を確認しています。この遺跡は、東大寺領伊加流伎荘の比定地の南西に位置しており、大溝は荘園方向に流れていることが

9 富山県教育委員会 1978 『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』

10 金田章裕 2007 「久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』砺波市教育委員会



安川天皇窯跡発掘時の様子



福山窯跡出土品



妻鏡」に登場します。

以後、中世を通して同家の所領で、領家と地頭が土地を折半する下地中分をしながらも中世末まで荘園は続きました。しかし、室町時代に入ると年貢の未納がしばしばあり、文明6年（1474）、徳大寺実淳は家領保全のために般若野に下向し、孫の実通も天文3年（1534）に下向、さらに天文14年（1545）にも出向いたとき、荘民に殺害されてしまいました。加害者は、雄神荘の石黒氏、越中守護代で増山城を支配した神保氏、すでに一向衆徒化していた在地農民などが考えられますが、はっきりとわかっていません。

しかし、これは荘園崩壊期の様相を示す象徴的な事件であったといえます。現在、安川の般若山薬勝寺の近くにある公卿九人塚が実通と従者の塚であると伝えられています。

承久の乱 般若野荘では治承・寿永の源平争乱のほか、承久の乱でも戦闘が行われています。承久3年（1221）6月、名越朝時ら鎌倉方の北陸道軍は般若野まで進攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦になりました。京方軍は敗れ、勝利した鎌倉方は同年6月中旬に入京し、幕府は京都監視のために六波羅探題を設置しました。

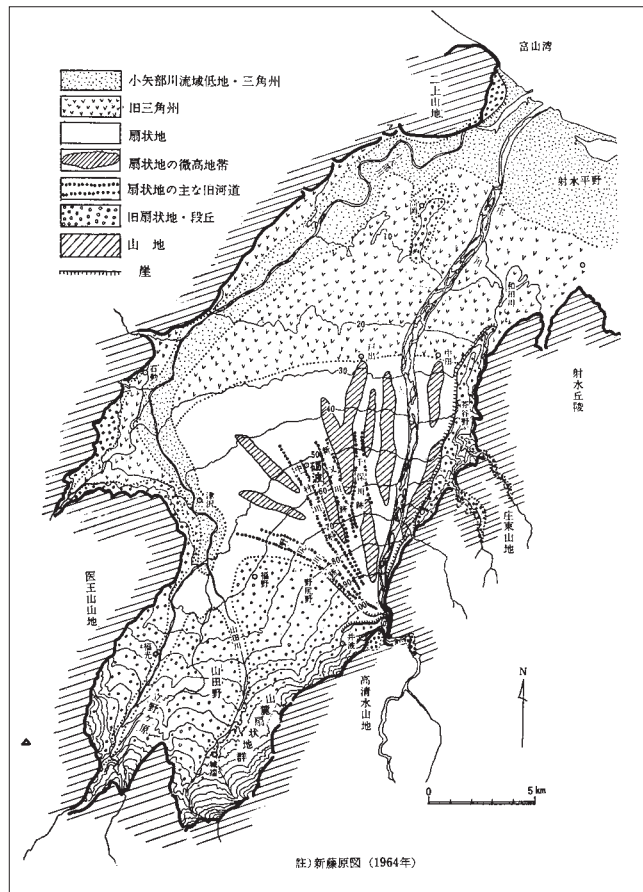
東保遺跡 荘域にある東保遺跡（東保高池遺跡）では、12世紀後半から13世紀前半の土師器が多量に出土していることから、しばしば酒宴の場であったと思われます。また、同遺跡からは墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構も検出されています。秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡は、ともに15世紀に位置付けられます。また、柳瀬比賣神社では奥殿



増山城跡の遠景



増山城下町の出土遺物



砺波平野の地形と旧河道



の工事中に氷見藪田石製の石造物（隨身坐像など11体）が発見されました。石造物の年代は14～15世紀とみられ、石動山信仰との関わりが指摘されています。

油田条 油田条は庄川扇状地の扇央部ではありますが、比較的安定した土地で、奈良時代末から平安時代頃の須恵器が出土する地帯です。史料上の初見は弘安元年（1278）、関東御家人の平賀惟長から弟惟致への議状です。その後、建武中興の頃には冷泉家の家領となり、さらに寛正3年（1462）には京都安楽院の寺領となっています。

増山城をめぐる攻防 増山城は越中守護代神保氏累代の居城です。足下に和田川の深い溪流をめぐらす山城で、戦国時代には常に戦乱の渦中にありました。貞治2年（1363）の二宮阿軍忠状に「和田城」を警固したと記されており、この城が増山城の前身だと考えられています。永正3年（1506）越後の長尾能景（上杉謙信の祖父）は神保慶宗とともに一向一揆と戦い、敗死しました。その後、神保長職が富山城の支城として整備しましたが、永禄3年（1560）、長尾景虎（のちの謙信）の越中出兵により落城、さらに2年後の永禄5年（1562）にも上杉輝虎（のちの謙信）に攻められ、城の周辺に放火されました。長職が没したのち、天正4年（1576）には七尾城に攻め上がる途上で謙信に攻略され、謙信没後は北陸を進攻してきた織田信長勢によって攻められ、越中平定を果たした佐々成政の支配下になりました。

神保氏

和田城

佐々成政

このとき城はもっとも整備拡充されたといわれています。しかし成政は豊臣秀吉に敗れ、城は前田利家・利長の領有となりました。前田家の重臣、中川光重（巨海斎宗半）が城代を務めました。光重は不在期間が長く、実質的には妻の蕭しょうが城を守ったと伝えられています。その後、蕭が没した慶長8年（1603）頃に廃城になったとみられます。

(5) 江戸時代 —川跡の開拓と農村の展開—

江戸時代がはじまる直前の天正13年（1585）、前田利家・利長父子が越中国砺波郡・射水郡・婦負郡を領有して以降、砺波郡は加賀前田家の支配となりました。また同じ年、砺波郡には大きな変動がありました。それは11月29日、越中・飛騨から伊勢にかけて大地震（天正地震）が発生し、庄川上流で山崩れのため溜まった水が一気に流れ出て、当時千保川を主流としていた水流が二つに分かれ、一筋が東に移って現在の庄川の流路ができました。のちに3代藩主前田利常は、今まで西へ流れていた庄川の諸分流をしめきって、この新しい流路へ全水量を移しました。これによって下流の高岡町および砺波平野は水害から安定し、旧河道は用水として整備されたので、平野の開拓が急速に進みました。

加賀前田家

川跡の開拓 川跡の開拓としては、中村川跡を開いた鷹栖出村（貞享2年（1685））、新又川跡の新又・坪北新・荒屋新・高儀出（貞享～元禄年間頃）や、文政3年（1820）の舟戸に用水開削以後急速に進んだ千保川跡の広大な新開があります。また、庄川の東の芹谷野段丘は砺波郡の十村である川合又八と射水郡の十村である島村九郎兵衛の協力によって開拓されました。二人は寛文3年（1663）、射水平野の灌漑と芹谷野段丘

11 十村（とむら）とは、他藩の大庄屋に当たる加賀藩特有の職名で、最初は十カ村を裁許したので十村肝煎・十村頭と言われたが単に十村となった。





芹谷野用水取入口



十村安藤家の多門

芹谷野用水

の開墾のために庄川で取水し、段丘上を北流して射水平野へ落ちる用水路開発を発案し、藩の許可を得て芹谷野用水を開きました。この事業は、藩の助力もありましたが、時期が良かったことから、翌年には20の新村ができ、ほぼ開拓の終わった元禄年間（1688～1704）には、あわせて25の新村と4,000～5,000石の村高を数えるに至りました。

出町の誕生 砺波平野の町々は、江戸時代の初めにいっせいに生まれています。本市の中心市街地である出町（杉木新町）も慶安2年（1649）に成立しています。杉木村二郎兵衛を筆頭に、太郎丸村七郎兵衛ら16名が連署して藩へ町立て（町の建設）の願書を提出したのは1月27日で、これはただちに許可され、雪解けを待って3月には早くも検地を受けて町の区割に取りかかりました。計画では長さ300間・幅80間、ここに100軒を建てるとあるので、中央に道を設けると1軒あたり平均間口6間・奥行40間となります。この区割はほぼ現在の町並みに引き継がれています。

町立て

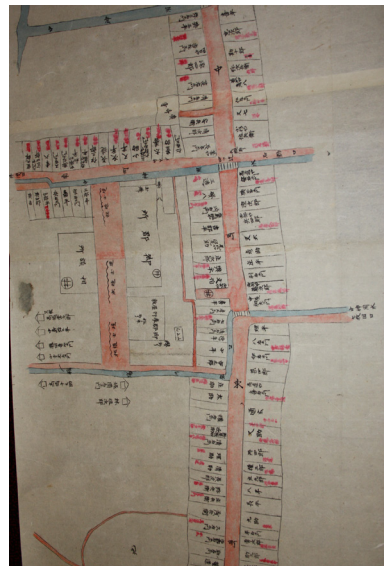
戸数は延宝年間頃（1673～1681）に予定の100戸近くになり、以後、文政2年（1819）158戸、嘉永4年（1851）201戸、幕末には町続きの村の連担戸数を加えて245戸となりました。戸数をみると町として順調に発展していったようにみえますが、砺波平野の他の町に比べて決して多いとはいえません。それは輸送の動脈ともいべき舟運に恵まれなかったことによる

御蔵

と思われる。藩の年貢米を収納する御蔵は、砺波平野ではいずれも小矢部川およびその支流沿いの町に置かれていましたが、杉木新町はこれから離れていたのです。わずかに藩士の知行米を扱う町蔵宿が元禄11年（1698）に認められたにすぎません。



砺波平野における町立て



天保6年（1786）中町西部屋兵四郎製図の出町絵図（個人蔵）





神田商店の土蔵群



材木の流送の様子



松川除一番堤道

しかし、砺波平野の中央に位置することから、行政的には砺波郡の中心的な性格を持つてきました。17世紀の半ばに改作法の施行に伴って十村制度が充実してくると、寛文6年（1666）には砺波郡の十村寄合所（寛文8年から十村相談所と改称）が置かれ、郡内の十村が毎月集まって農事の奨励など職務上の協議をしたり、軽い民事を裁いたりしました。その後、文政4年（1821）には郡奉行の出張所である砺波御郡所が置かれ、明治以降、郡治局をはじめ国や県の出先機関が設置される布石となりました。

十村寄合所

砺波御郡所

加賀藩の農村制度 十村の所管する村組は、はじめは便宜的なものでしたが、元和2年（1616）・寛永12年（1635）の組寄せを経てしだいに整備され、改作法の進行に伴って承応元年（1652）には砺波郡は10組となりました。市域の村々は、般若組・若林組・蟹谷組・石黒組に属しました。この組割は長く続きましたが、天保10年（1839）、いわゆる天保の改革に関連して組替えが行われ、砺波郡は16組となり、市域では般若・庄下・若林・野尻・糸岡・山見の各組に含まれました。

藩の農村支配のうえで重要な役目をもった十村には、初期の寛永以前には太田村金子家、中条村川合家（のちに戸出町に移転）、開発村安藤家があり、以後、東保村菅野家、同前山家、宮丸村安藤家、金屋本江村長田家、権正寺村島家などがありました。また十村に準ずる山廻役には杉木新町高島家がありました。

江戸時代の産業 産業としては米作が中心で、目立ったものはありませんが、ほかに麻布、木綿織、酒造があります。麻は文化元年（1804）に鷹栖屋五右衛門が周辺農家で生産される八講布の集荷商売をはじめ、幕末には神島屋（神田氏）が創業しています。砺波地方の木綿織は、文政初年（1818～）、福野村の寺島屋源四郎が棧留縞を導入したことに始まりますが、天保3年（1832）に源四郎が亡くなると、同村の四日屋吉左衛門がそのあとを受けて砺波郡の原料系の御仕入人を勤めています。

庄川地域では、特産品として金屋白、五ヶの種粃、金屋のユズとネギ、里山の和紙、石炭、金屋石などがありました。

金屋石

庄川の流送 加賀藩のおこりとともに急激に木材の需要が高まったため、藩は庄川上流の五ヶ山・白川方面に材木を求めて庄川へ流しました。すでに文禄3年（1594）には金屋に藩の材木 圀場が設けられ、用水を通して各地へ運ばれました。

12 慶安4年(1651)から明暦2年(1656)にかけて加賀藩5代藩主前田綱紀の後見をしていた前田利常(3代藩主)が行った農政改革。改作奉行・十村制を中核とした地方支配機構の整備、救民制度の充実が主な内容である。



4年（1915）、砺波鉄道（加越線）の福野～青島間が開通し、木材の搬出、ダム工事資材の輸送や住民の足として利用されましたが、昭和47年（1972）9月に廃止となりました。

大正に入り、第一次世界大戦後の好況と工業化の進展によって、大正7年（1918）には若鶴酒造・出町麻織物・中越製布・北陸綿業、大正8年（1919）には金岡工業・橋本木工場、同9年（1920）には中越印刷など、新たに設立されたり、従来の企業を株式組織にしたものがこの時期に多くみられます。

木材集散とダム建設 明治以後、庄川地域の産業で活況を呈したのは、木材の集散でした。明治に入って材木の川下げが民間に解放されると、飛騨高山の中尾洞七は、明治7年（1874）金屋・青島などの有志と図って飛騨材の川下げに成功しました。これをきっかけに地元の木材業者も事業を始め、明治12年（1879）頃の年間伐採量は10～15万石に上りました。この木材によって慶応2～3年（1866～1867）に庄川挽物木地の生産が興り、現在も伝統的工芸品として技術が伝えられています。また明治40年（1907）頃から動力製材所がいくつもできました。

大正9年（1920）、岐阜県に飛州木材が設立され、翌年富山県側の庄川木材ら3社を合併して庄川上流と下流を一体化した流木会社となりました。これと前後して浅野総一郎は庄川水力発電会社を設立し、小牧ダムの築造を計画しました。事業はその後、日本電力のテコ入力で大正14年（1925）に着工しましたが、流木が不能になるとすぐ飛州木材との間に争いが起こり、いわゆる庄川流木争議として泥沼の様相を続けましたが、ついに流木側が敗れ、昭和5年（1930）9月、当時「東洋一」と謳われた小牧ダムが完成しました。

産業と農業 農業基盤の改良の上で大きな成果を上げたのは、庄川からの取水を合理化するための用水合口です。大正5年（1916）頃から取り組まれ、小牧ダムの完成を機に計画が進み、昭和15年（1940）に完成しました。その後、第二次世界大戦後の農地改革、また昭和40年代の圃場整備事業と大型機械化によって農業経営の様子も大きく変貌しています。大正期に始まったチューリップ栽培は、戦後輸出球根として脚光を浴び、今では球根出荷量が全国一を誇るまでに成長しました。また昭

第一次世界大戦

川下げ

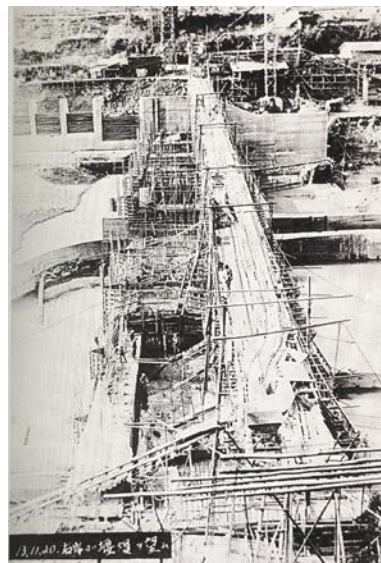
庄川挽物木地

小牧ダム

庄川合口ダム



工事中の小牧ダム



工事中の舟戸合口ダム



和 27 年（1952）に始まった「となみ
チューリップフェア」は、現在は毎
年 30 万人以上が訪れ、富山県を代表
する観光イベントとして活況を呈し
ています。



昭和初期の農村風景

散

村

砺波地方の農村景観で特徴的な
のは、「散村（散居村）」です。各農家
が 50m から 100m ほど離れて点在し、
それぞれ周囲の水田を耕作していま
す。これは中世末から急速に進んだ

庄川扇状地の開発において、農民が自分の開墾地の真ん中に「カイニョ」と呼ばれる屋
敷林をめぐらした居を構え、その周囲を開いていったためです。そして、平坦で地形上
の制約があまりなかったことと、網状に流れる水路があってどこへでも水を引けたこと
が有利にはたらきました。また、水田が住居の周囲にあることは管理上便利であったこと
から、現代まで散村の景観を維持してきました。

圃場整備

市域では、昭和 38 年の東野尻地区をトップとして続々圃場整備が行われ、大型機械
導入に対応しました。一方、市街地でも区画整理事業が進むとともに、庄川左岸の旧河
川敷に工業団地が誘致されました。

昭和 48 年（1973）には北陸自動車道の砺波～小杉間が開通し、高速道路時代の第一
歩が踏み出され、のちに北陸自動車道に東海北陸自動車道と能越自動車道が接続されま
した。

